

大谷光瑞とケマル・アタチュルクの アンカラ・アヒマスッド農園での共同事業について

嵩 満也*

On Kozui OTANI's Joint Enterprise at Kemal Atatürk's Ahi Mesudo Farm

Mitsuya DAKE*

Kozui OTANI was 22nd head priest of Nishihongwanji sect and Kemal Atatürk the first president of Turkish Republic. The former is a religious figure and the latter a political leader. There seems no common ground to tie two persons. However, both of them were used to express their profession as a farmer in common. It is well known that Kozui started two joint enterprises of farming industry in Turkey. In this paper, I would like to trace Kozui Otani's joint enterprise at Kemal Atatürk's Ahi Mesudo Farm in Ankara historically and discuss about his intention of starting enterprises in Ankara.

はじめに

1927年3月28日、在トルコ日本大使木幡西吉は外務省に送った報告書の中で、日本とトルコの間の新しい関係を開く出来事を外務省に伝えた。その内容は概略次のようなものであった。

1. ケマルパシャ大統領と大谷光瑞氏の間にアンカラ郊外の「アヒマスッド農園」で共同経営する契約が交わされたこと。
2. 既にその契約が1927(昭和2)年2月22日にアンカラで調印されたこと。
3. 契約書には、ケマルパシャ大統領、大谷光瑞氏、そしてトルコのイッシ銀行それぞれの代理人がサインしたこと。
4. 農園事業の資本金の5万1千リラを大統領、5万リラを大谷光瑞氏が払うことになったこと。
5. 大谷光瑞氏は3月17日に2万5千リラをイッシ銀行に振り込み、残額を4月中に上海から送金することになっていること。
6. 事業で雇用する者の内、8人は日本人で残りはトルコ人となること。

この報告書は、本願寺第22世宗主大谷光瑞が、トルコ共和国初代大統領のケマルパシャ、すなわちムスタファ・ケマルと、トルコの新首都アンカラ市郊外にあるアヒマスッド(Ahi Mesudアーヒー・メスド)農園で、共同事業を始めたことを本国に伝達するものである。このケマルパシ

* 龍谷大学国際学部教授

ヤが所有するアヒマスッド農園で始められた農園の共同事業は、日本とトルコの間で行われた最初の経済的な共同事業でもあった。

では、このアンカラのアヒマスッド農園での共同事業は、どのようなものだったのか。また、どのような経緯から大谷光瑞はトルコでそのような事業を始めようとしたのか。現存する関係資料が乏しく、その全体像については不明な点が多い。小論では収集した関係資料と現地調査の結果を踏まえて、共同事業開始前の大谷光瑞の動向と、未だに確定されていない農園の所在地に焦点をあてて考察をすすめたい。また参考資料として、ヤマンラール水野先生と三谷真澄先生と共同で作成した「大谷光瑞トルコ関連年表」を付している。

1. アヒマスッド農園での大谷光瑞とケマルパシャの共同事業

大谷光瑞は、生涯の間に4回トルコの地を訪れている。1回目は1901年7月のことである。当時ロンドンに留学していた光瑞は、フランス南部のモンレーとカンヌを回り、オーストリアのウィーンからハンガリーのブダペストを経由し、トルコのイスタンブールまで足を伸ばしている。日本人で最初にトルコを訪問したのは、奇しくも西本願寺より欧州視察のために派遣された島地黙雷であるが、日本への帰路にイスタンブールに立ち寄って10日間ほど滞在し、「実に天下無比の勝景なり」という感想を残している。(二葉編 1978, 76-82 頁) しかし光瑞は、最初の訪問の時にはイスタンブールについては何も語っていない。けれどもそれから25年後の1926年4月に2回目の訪問をしたときには、次のような感想を書き残している。

四月十一日午前十一時半、コンスタンチノーブル港内に投錨せり。(中略)

十餘年の舊遊を追想するに、景概大差なしと雖も、對岸のスクタリは著しく人家を増加せり。港内の泊船はその數多からず。(中略)

市街も十餘年前に比して大差なしと雖もやや清潔なるが如し。(大谷 1935, 481)

大谷光瑞は、取り立てて景色などには深い感銘を受けているような印象は受けないが、2回目の訪問では、革命直後の混乱期とは言え、何か清新な変化を感じ取っているようである。また別の箇所では、あまり発展と進歩の跡が見えないトルコの現状を嘆きつつも、新生トルコが持つ秘めた発展の可能性についても書いている。

たとえば、港湾の税関が煩瑣な手続きを要求することの不便さを嘆きつつも、「元来當港の地位は完全なる中継港たらざるべからず」(大谷 1935, 482)と、黒海とアラル海そして地中海航路の要衝に位置するコンスタンチノーブルは、アジアとの交易だけでなく地中海の重要な中継港として大きな可能性を秘めていると指摘している。また、フランスやイタリアさらにはイギリスへ移動する鉄道と航路の起点となっていることから、日本から欧州へ向かう上で格好の中継点となるはずであると述べている。ただ、それにもかかわらず日本人の来訪が年間数十人に留まっているのは、そのような事情を日本人がまったく知らないからで、もっとトルコが地理的に占める重要な位置について日本人は知るべきであるとも書いている。さらに、本来そのような情報を日本国内に伝えるべき外交官の中に、そのことを理解している者が少ないことを嘆いている。

ところで、大谷光瑞はこの2回目のトルコ訪問に先立つ3ヶ月前、1924年2月14日に、徳富蘇

峰の企画で開かれた東京帝国ホテルでの講演会で、「近東最も有望なるトルコ」と題して初めて公に「トルコ」との交易が有している可能性について語っている。トルコ共和国が建国されたのは、1923年10月29日のことで、日本の経済界でもトルコに対する関心が高まっていたのである。この時光瑞は次のように語っている。

私はヨーロッパの内の所謂近東のバルカン各地方、アジアトルコ地方が、将来非常に面白くなると思ひまして、日本の商人が、あの辺にどう目を付けているかと、いろいろ調べて見ましたが、さすがに大阪人は如才がござりませぬ。もうあの辺に入りこんでおります。上海の正金銀行で、あの辺の為替が動くかと聞きました所が、動きがあるということでござりました。

この勢いで参りましたら、正金銀行がコンスタンティノーブルに支店を設けるようになりますのも遠くはござりますまい。（『大谷光瑞全集』第十卷、370）

また大谷光瑞は、1926年に2回目のトルコ視察のために日本を出発する時からすでにトルコへの投資について決心していたと考えられる。出発直前の1926年2月3日に、前年の11月16日に設立された「日土貿易協会」の設立を祝賀する記念式典で、光瑞は創設者のひとりとしてスピーチをしている。そこで光瑞は単刀直入、次のように出席者に呼びかけている。

皆さんは売るとを考へる。私は買ふとを考へる。今度、私は買ふべき綿や羊毛を觀にトルコへ行きます。買ふべきものは仲のよい国から買ふのが当然だから。

発言の行間からは、革命後まだ間もないトルコ共和国を経済的に支えようとする意識が垣間見える。このような独立したばかりのトルコへの強い関心から来る、台湾、ジャワ、マレーシアに続く共同事業有力候補として、光瑞がアジアの最西端にあるトルコの地を考えていたことは間違いない。また後年、大谷光瑞のトルコ事業の責任者となる上村辰巳は『瑞門会誌』上で、1925年の春になると大谷光瑞自らがトルコに投資する決心をしていたらしいことを述べていることもそのあたりの事情を伝えていると言えよう。

そして、講演会の5日後の2月8日、大谷光瑞は神戸港からトルコへ向かって出発する。光瑞の乗ったフランス船「ダルタンヤン号」は、香港、サイゴン、プノンペン、コロンボ、アデン、ジブチ、スエズを経て、2月27日にポートサイドに着いた。そこでイギリス船「バラスキ号」に乗り換え、ハイファ、バイルート、トリポリ、アレキサンドリア経由でトルコ領のメルシンに到着する。

注目されるのは、船が出港するまでの時間を使って、自動車でアナトリアのアダナ平原を視察し、トルコの農地の土壌のすばらしさを褒めちぎっていることである。

地味豊饒の地方なり。（中略）ナイル河の三角州に比べて砂少なく、土多し。

実に最良の沃土なり。農民の言う所によるに冬は麦作し、夏は綿作す。（中略）若しこの平原を完全に開発せば、又、エジプトを羨むを要せざるなり。（大谷 1935, 479-480）

自分の職業を「農業」とした大谷光瑞のトルコの農地に対するこの高い評価は、光瑞のこの国との共同事業への期待の高さを示している。しかし、同時のそのような可能性をトルコも日本も生かし切れていないという思いもあった。たとえば、光瑞はイスタンブールで、トルコ政府とトルコ人、日本政府と日本人に対して次のように発信している。

（コンスタンチノールは）天然の要地なりと言えども、神戸、上海の如く重要な位置を占むる能わず。黒海・多島海の間に介在し、この目的に於いては上海、神戸に勝れり。

然れどもトルコ政府に於いても、この意思を有せざるが如く、全然中継港としての設備を放任し、顧みる所なし。内国産物の輸出港としては、その後方地帯の富源、遠くスミルナに及ばず。トルコ政府もこの天然の形勝を如此く利用するに非らざれば国富を増加する能はず。

経済発展とは人がこれを行ふなり。天はこれを行ふに非ず。人その地に渡らず。その地の状況を知らず。如何にして発展すべき方策を構すべきや。今日朝野の近東地方経済発展を口にする人にして、幾人この地方に來りしや。外務当局は当地に大使を特派し国交を尋ねると言えども通商に関する、商務官も、領事館も派遣せず。いやしくも口に経済発展言い、その行う所、経済発展を助けず、何の日か発展の期あらんや。

不肖は帝国商業會議所に告ぐ。トルコ国内に我邦の商品を輸入するに先ち、トルコの物産をわが国へ購買すべし。物産は決して欠乏せず。トルコは原料国なり。わが国は加工国なり。近時トルコ貨幣は下落し、輸出に利あり。わが商人は内地に入り物産の購買に力めざるべからず。二十余年、シナ内地に物産の購買をなせし本邦商人が、今日の対支貿易の基礎を作れり。当国の貿易も又如此くなさざるべからず。

これ本邦商人必ずすべき任務にして、この任務を欲せざれば百の商務館ありといえども決して商務の振興を期すべからず。（大谷 1935, 481）

同行した上村辰巳によれば、大谷光瑞はイスタンブールにおいて、滞在した2週間以内に、百人以上の人と面会していたという。農務大臣、外務大臣などの政界有力者をはじめ各地の有力者と会い、彼らの協力をえて農園事業に適した数多くの土地を見学することができた。この2回目のトルコ訪問の最大の成果が、在トルコ大使の木幡の報告にあったケマルパシャ大統領との「アヒマスッド農園」での共同事業だったのである。そして、10月に又來る決心をした大谷光瑞がイスタンブールを發ったのは、1926年5月13日のことであつた。

パリに移動した大谷光瑞は、在フランスの安達大使の招きで、トルコ大使を辞して日本へ帰国する途上の小幡トルコ大使の送別の宴にも出席している。その席上、光瑞は「不肖亦木幡大使と二十餘年の舊知ない。特に最近トルコに起業するや大使を煩わすこと少なからず。」と、トルコでの事業を進める上で大いに協力してくれた木幡大使の労をねぎらっている。アンカラでの農園の共同作業が成就した背景には、光瑞と木幡大使との個人的な親交も大いに役立っていたのである。

2. アヒマスッド農園の所在地について

ところで、木幡大使が日本への報告書の中で、大谷光瑞とケマルパシャ大統領との間で結ばれた共同事業の所在地として書いているアヒマスッド農園の場所は、アンカラ市郊外のどこだったのかはこれまで分かっていなかった。しかし、今回の現地調査により、ほぼその場所を確定することができた。

トルコ革命を指導し、オスマン帝国を打ち倒し、トルコ共和国を樹立したアタチュルクは、大統領に就任した後も自分のことをよく「農民」と呼んでいたとされる。この点は、大谷光瑞が自らの職業を「農業」とパスポートに記入していることとよく似ている。トルコ共和国樹立後、新首都アンカラの築造や近代的産業の導入など矢継ぎ早に改革を断行したアタチュルクは、従って農業改革も革命の目標の一つとして取り組んでいる。そして、乾燥地帯にあるアンカラを繁栄させるための手段の一つとして、アンカラ市郊外に個人資金でおよそ2万ヘクタールの広大な土地を買い、乾燥して荒れたその土地に農園を作るという事業を進めていた。このアタチュルク農園は当時ガージ農園と呼ばれたが、アタチュルクは荒れ地を豊かな農土地に変え、後にすべて国に寄付されてからはアタチュルク森林農園（Ataturk Orman Ciftligi）と呼ばれるようになる。光瑞のアヒマスッド農園はたぶんこのガージ農園の一部であったと考えられるが、実はこれまでその場所は特定されていない。

今回の調査では、アンカラ市郊外に現在も存在しているアタチュルク森林農園へ行き、森林公園内にあるガージ農園を訪問した。驚いたことに農園は現在も操業しており、野菜の栽培や牧畜が営まれていた。園内の中心にある建物内には創設当時の近代的な機械や農機具が保存されており、園内の庭にはバラの木も多く植えられていた。光瑞はアンカラで栽培したバラの花から香料を採取する工場を営んでいたとされるが、この地がバラの栽培に適した場所であることはまちがいない。

訪問したガージ農園では、突然の訪問であったにもかかわらず、農園の主任が農園内の施設を案内してくれた。また、農園で生産しているトマトジュースやアイスクリームを振る舞ってくれた。トマトジュースはトルコ全土に流通している人気商品だそうである。ただ、こちらからアヒマスッド農園について質問したところ、過去に日本人の大谷光瑞とアタチュルクとの間で共同事業がおこなわれたことがあることについては全く知らない様子であった。それでも、アヒマスッド農園の所在地については、われわれの説明を聞いて、たぶん現在の農園内ではなく少し離れた場所であろうという情報を得ることができた。そこで、その言葉を頼りに、かつてアヒマスッド農園があったと考えられる場所へと急いだ。

かつてアヒマスッド農園があったとされる場所は、現在のガージ農園から4キロほど離れた場所、エチメスグッドという鉄道駅の近くであった。駅の近くには民家やビール工場があったが、駅の裏側の何もない荒野のような場所に、2軒の民家が隣り合わせにぼつりと立ち並んだ場所が土地では今は何も栽培されておらず、かなり荒れており、表土には石や瓦礫が混じっていた。そこに立ち並んでいた民家は、朽ちかけていたが、土地・家屋の台帳は軍部の管理となっており、最終的な確認をすることはできなかったが、総合的に判断して、この地がかつて「アヒマスッド農園」があった場所であることはまちがいないと確信した。

3. 大谷光瑞トルコ関連年表

大谷光瑞トルコ関連年表

年月日	年齢	動向	関連事項（他の参考資料から）
1926（大正15）年 1月28日	51歳	徳富国民新聞社長発起による大谷光瑞の渡欧に向けた送別会（東京）	
2月2日		本願寺派関係有志による渡欧送別会（三夜荘）	
3日		日土貿易協会発足式，来賓として出席，演説	
8日		佛国郵船ダルトニヨン号にて神戸発（上村辰巳が随行）	日土貿易協会設立 （2月3日大阪商業会議所）
		サイゴン（アンコル号），シンガポール・コロンボ，アデンジブチー等に寄港	
3月28日		ポートセッド着（黒木領事出迎）	
		カイロ往復	
30日		ポートセッドに戻る	
31日		カンタラ（陸路）	
4月1日		エルサレム着（陸路）	
2日		ナザレ（陸路）→ハイファ着（午後3時）（陸路） →ハイファ発（バラスキ号）	
3日		ベ（イ）ルート着	
4日		トリポリー着	
5日		アレキサントレツタ着	
6日		メツシナ（メルシン）着（トルコ領）	
7日		アダリア（アンタリヤ）着	
8日		ロデス（ロドス）着	
9日		ミチレン島（レスボス島）カタル着→スミルナ（イズミル）着	
10日		ニフ（陸路）→正午ダーダネルス海峡	
11日		トルコ第2回訪問 マルマラ海→午前11時半コンスタンチノーブル（イスタンブル）着（トカテリアン・ホテル泊）	
21日		コンスタンチノーブルの対岸ハイデルパシヤ発 16:30→イスメット（イズミト）→	
22日		アンゴラ（アンカラ）着13:30（2時間延着）	
			近東貿易会議イスタンブル
26日			4月26日（月）
27日		アンゴラ発9:30→エスキシェヒル着21:30→ （車内泊）	4月27日（火）
28日		→コニア（コンヤ）発9:30→アダナ着21:30	4月28日（水）
29日		地方の農務局長訪問→アダナの大地主カジルベ （カディル・ベイ）農園訪問→	4月29日（木）
		農学校・農事試験場	
30日		アダナ発6:00→コニア着19:30（ホテル・バグ ダッド泊）	4月30日（金）
5月1日		コニア平原観察	5月1日（土）
2日		コニア発20:00→エスキシェヒル→	5月2日（日）
3日		アンゴラ着	5月3日（月）
4日		アンゴラ 農務大臣サブリ・ベイと会見	
5日		コンスタンチノーブル着	5月5日（水）終
7日		コンスタンチノーブル発9:00 汽船マルマラ号 →ムダンヤ→ブルサ	

		海上4時間+陸路2時間	
8日		地方農務局長訪問→午後 農学校視察→業蚕学校	
9日		ムハリジ村付近 種畜場 15:00 辞す 車故障→ブルサ着 21:00	
10日		ブルサ発 7:30→ムダンヤ→コンスタンチノーブル着 16:00	
13日		コンスタンチノーブル発 10:00 イタリア汽船 ロイド・トリエスチノ会社	
14日		クレオパトラ号→ギリシャ ヒリュス港→コリ ント湾 15:00	
15日		プリンデシ（イタリア）着 12:00 汽車にてロ ーマへ出発 18:00	
16日		ローマ着 8:30（留学生 大城築が訪問）	
		ミラノ→ルガノ→ルチエルン（汽車）	
21日		ベルン着	
22日		ベルン→モントロー	
24日		パリに向かう	
6月1日		パリ→ブルッセル着（上村，廣瀬はロンドンへ 飛行機）	
5日		デンハーフ着	
6日		アントウエルプ着	
8日		ブルッセルに戻る	
9日		パリ着，バラ園など見学（上村，廣瀬ロンドンか ら帰る）（後藤トルコから来る）	
15日			日土協会設立（評議員に就任）
9月15日		パリ→ドーヴァー→ロンドン着，植物園等見学	
23日		ロンドン→ドーヴァー→オステンド→ブルッセル →	
26日		ベルリン着，飛行機調査	
27日		ロールバッハ工場見学	
28日		ユンケル会社見学	
29日		スターケン飛行場（試験飛行見学）→ベルリン発	
30日		パリ着，滞在中自動車・農業用トラクター等の調 査	
10月14日		パリ発（鉄道）	
15日		マドリッド着	
16日		バルセロナ（着）	
18日		マルセーユ着	
19日		ラシヨタ飛行機製作所，大造船所等見学→マルセ ーユ発	
20日		カンヌ着	
21日		ローマ着（3日休養）	
24日		ローマ発	
25日		タオルナ着（シシリ島）	
27日		ナポリ着	
29日		ナポリ→トルコへ向かう（ブラジル号）	
11月3日		トルコ3回目訪問 コンスタンティノーブル着	
6日		大連から学生 塩尻，須山来る	
8日		コンスタンチノーブル→ブルサ（農産物，農地視 察，租借地の選択）	
19日		ブルサ発→コンスタンティノーブル着	

21 日		アンゴラ着，農務総長サブリ・ベイ他旧知を訪問，官有地租借に関して談する	
22 日		アンゴラ発	
23 日		コンスタンチノーブルに戻る	
23 日？		小幡大使の招宴	
24 日		コンスタンティノーブル発（セミラミス号），単身帰朝	
27 日		プリンデツシ着	
29 日		ナポリで箱崎丸に乗船	
12 月 2 日		ポートセッド発	
14 日		コロombo着	
22 日		コロombo発	
28 日		香港上陸，総領事館（大正天皇崩御弔意）→香港発	
31 日		上海着	
1927（昭和2）年 1 月 2 日	52 歳	上海発（上海丸）	
4 日		神戸着→神戸郵船支店で会見→三夜荘	
5 日		都ホテルにて京阪諸新聞記者に会見	
2 月 23 日		ケマル・パシヤ（アタチュルク大統領）の「アヒマスド農園」と共同経営契約	
		トルコ第 4 回訪問	
1928（昭和3）年 6 月 9 日	53 歳	門司発（北野丸）→	
11 日		上海着	
15 日		香港着	
16 日		香港発	
21 日		シンガポール着	
22 日		シンガポール発（オブテンノルト号）	
23 日		バタア着	
24 日～7 月 8 日		バタア市の共進会で大谷農園の蚕糸等を陳列	
8 月 5 日			エルトゥールル号追悼祭（8 月 5，6 日）
9 月 8 日		バタビア発（ニューホランド号）→シンガポール→コロombo→アデン・スエズ	
10 日		シンガポール着	
14 日		シンガポール発	商工省コンスタンティノーブルに日本商品館開設を決定，日土貿易協会に委嘱
19 日		コロombo着	
20 日		コロombo発	
27 日		ポートセッド着，トルコより鈴鹿，上村辰巳出向かえ，トルコでの染織経営計画	
		農場経営の為	
10 月 5 日		ナポリ着 鈴鹿市染織機械受取等の為パリへ	
7 日		マルセイユ着→（鉄道）カンヌ着→グラス 純粋香料生産者ミセル氏と面会	
11 日		マルセイユ→リヨン	
12 日		領事館訪問→パリ着	
19 日		パリ→ロンドン着	
21 日		ブルッセル	
22 日		永井大使訪問→オランダ デンハーフ着	

23 日		デンハーフ発→パリ着 小幡大使帰国前の招宴	大阪商業開館で商品館設立懇談 会貿易業者に参加を募る
26 日		パリ発	
27 日		ロザン着	
11 月 1 日		ゼネヴ→リヨン, 絹糸研究	
4, 5 日		ヴァランス→ニム 香料, 蚕業調査	
7 日		アレス・モンペリエ→マルセイユ着 小泉博英	
10 日		友田領事の招宴 (御大典)	
12 日		エイクツス着 10 日滞在 蚕業, 農業視察	
21 日		マルセイユ着	
25 日		パリ着	
26 日		デンハーグ着, ジャヴァでの地所購入のため	
29 日		パリ, サンジェルマン農園見学	
30 日		アヴィニョン着農事試験場長ボルダス氏に面会, ローズ河葡萄の情報	
12 月 1 日		マルセイユ着	
2 日		白山丸入港, 学生壬生正行来会, →グラス	
7 日		グラス→ツーロン着, サナリで 1 泊	
8 日		バンドン着	
9 日		体調不良の為, マルセイユに戻る, 胃腸障害と診 断	
11 日		マルセイユ→ナポリ・ピレウス寄港 (9 日以来摂 食なし, 身体衰弱 ナポリ以来黄疸併発・胃腸障 害	
18 日		コンスタンティノーブル着, 芦田代理大使出迎 え, 仏国病院入院, 病やや重し	
31 日		回復し, オスマンベイの居に帰る	
		上杉, 後藤, 大城, 京都からの商業顧問鈴鹿氏と 居を共にする	
		アンゴラ農園から塩尻来る	
1929 (昭和 4) 年 1 月 1 日	54 歳	病をおし, 大使館の元旦拝賀式に参列	
2 日		余絶対静養, 塩尻アンゴラに戻る	
4 日		交代でアンゴラから須山来る	
15 日		身体回復	
20 日		平常に戻る	
21 日		ハイデルバッシュ発→アンゴラ	
22 日		アンゴラ着 (9:00) →農園 (アンゴラから 25 km)	
23 日		アンゴラに戻る (大谷光瑞の) 農林工業会社共同 資本家イシュ銀行	
		頭取ゼラルベイ氏と面談 芦田代理大使の招宴, 秘書官長テフキクベイ, 議会副議長フセンベイな ど, ホテル泊	
24 日		テフキクベイと面会→アンゴラ発 (19:05)	
25 日		ハイデルバッシュ着 (9:00) オスマンベイの居に 戻る 博物館見物	
26 日		ムダンヤ着 (15:00) →ブルサ着 (17:00), (大 谷光瑞の) 絹布工場 (建設中), 夜ムケルゲ温泉 (大谷光瑞の) 蚕絹業の共同資本家メムドフベイ 氏を訪問	
		絹布工場は昨年 (1928 年) 末着工, 風雪のため 進まず, 4 月 1 日開業予定	

27 日		メムドフベイ氏所有ススル農園，イシュ銀行経営 絹布工場等見学	
		新温泉（イエニ・カプルジャ）泊	
28 日		ムダンヤ→オスマンベイの居へ（15：00）	
2 月 1 日		ハイダルパシャ発（9：00）（帰国の途へ），後藤 智を伴う	
3 日		アレppo，シリア着→ホム→トリポリ泊	
4 日		山崩れで鉄道不通，車で移動，ハイファ泊	
5 日		ハイファ発→カンタラ→ポートサイト（マリナパ ラス・ホテル泊）	
6 日		黒木領事訪問	イスタンブル旧総領事館購入 （5 月）
8 日		榛名丸搭乗帰途へ，後藤智はエジプトへ，竹井謙 一マルセイユから乗船し随行	
20 日		コロンボ着	
25 日		シンガポール着，ジャヴァから高津，川田来る， ジャヴァの近況報告	
26 日		シンガポール発	
3 月 4 日		香港発	
7 日		上海着（11：00）	
8 日		上海発（12：00）	
11 日		神戸入港，榛名丸で帰朝→三夜荘に帰る	
29 日			コンスタンティノーブル商品館 開館式
			トルコ商務大臣，芦田代理大使 出席
4 月			樫野崎に遭難慰霊碑
			稲畑勝太郎撰，篆額大谷光瑞
6 月 3 日			天皇行幸
8 月 4 日			日土合並絹織物工場落成
9 月 1 日			コンスタンティノーブル商品館 開館式
			安江安吉館長着任
1932（昭和 7）年 1 月 31 日	57 歳	ブルサ絹織物工場共同経営者メムドゥフ・ベイ死 去（54 歳）	
1936（昭和 11）年 頃	61 歳	大谷光瑞・ギョクチェン家提携の実質的解消	

注：第 2～3 回トルコ訪問は「地中海遊記」，4 回目は「鵬遊記」を参照

注

- i 後にケマルは，ムスタファという名を捨てて，ケマル・アタチュルクと名乗るようになる。アタチュルクとは「父なるトルコ人」という意味で，1934 年に国民全員が姓を名乗ることを認める創姓法が施行されたときに，大国民会議から送られた名前である。

参考文献

【アンカラにおける農業経営に関するもの】

1926 年

上村辰巳，「エルサレムの聖地巡禮より君府迄」『大乘』第五巻第 7 号 pp.83-88

廣瀬了乗，「香料ローズに就て」『大乘』第五号第 10 号 pp.69-84

上村辰巳，「亜細亜トルコ巡禮記」『大乘』第五号第 10 号 pp.85-91

上村辰巳，「亜細亜トルコ巡禮記（二）完」『大乘』第 5 巻第 11 号 pp.65-74

上村辰巳,「最近の土耳其」『大阪商業会議所 月報 252 号』 pp.1-2

1927 年

上村辰巳,「トルコ通信 I: トルコに於ける私等の農園生活片々」『大乘』第七巻第 1 号 pp.42-51

伊藤謙三,「土耳其行」『大乘』第七巻第 1 号 pp.52-58

突厥呆者,「アンゴラのアヒマストの歌」『大乘』第七巻第 1 号 pp.59-60

上村辰巳,「トルコ通信 II: トルコに於ける私等の農園生活片々」『大乘』第七巻第 2 号 pp.62-74

須山彰,「アンゴラの干地農法」『大乘』第七巻第 2 号 pp.75-82

塩尻彦一,「アンゴラ原仕事」『大乘』第七巻第 2 号 pp.83-84

上村辰巳,「トルコ共和祭の其の夜 (1): 於君府」『大乘』第七巻第 10 号 pp.51-57

上村辰巳,「トルコ共和祭の其の夜 (2) 終: 於君府」『大乘』第七巻第 11 号 pp.49-67

1929 年

稲畑勝太郎,『欧亜に於て』日本評論社 pp.243-244

1930 年

上村辰巳,「君府の秋」『大乘』第 9 巻第 12 号 pp.36-40

1935 年

大谷光瑞,「地中海遊記」『大谷光瑞全集』第九巻 pp.480-503, pp.555-562

大谷光瑞,「鵬遊記」『大谷光瑞全集』第九巻 pp.434-439

2006 年

İzzet Öztoprak, Atatürk Orman Çiftliği'nin Tarihi, Ankara pp.35-39 (アーヒー・メスト地区の農地に関して)
<http://www.etimesgutbel.tr>. アーヒー・メスト地区の農地が「手本的の村」となった経緯に関する資料 (大谷光瑞の農場に関しての記述はない)

【大谷光瑞とトルコに関するもの】

1935 年

大谷光瑞,「地中海遊記」『大谷光瑞全集』第九巻 pp.451-567 (大谷光瑞の 1926 年の欧州・トルコ訪問旅行記)

大谷光瑞,「鵬遊記」『大谷光瑞全集』第九巻 pp.383-450 (大谷光瑞の 1928-29 年の欧州・トルコ訪問旅行記)

1998 年

松谷浩尚,「第 6 章大谷光瑞」『イスタンブールを愛した人々: エピソードで綴る激動のトルコ』中公新書 pp.107-128

2010 年

エルダール・キュチュクヤルチュン,「大谷光瑞とトルコ: 建国の父ケマルパシのパートナーとしての大谷光瑞」柴田幹夫編『大谷光瑞とアジア: 知られざるアジア主義者の軌跡』勉誠出版 pp.270-314

2010 年

Erdal Küçükyağcı, 'Otani Kozui ve Yeni Türkiye Cumhuriyet Dönemi Türk-Japon İlişkilerinin Kuruluşunda Bir Vizyonerin Rolü' (Otani Kozui and the New Turkish Republic: The Role of a Visionary in the Establishment of Turkish-Japanese Relations during the Republican Era)

Hilal ve Güneşi İstanbul'da Üç Japon (The Crescent and the Sun: Three Japanese in Istanbul), İstanbul, pp.161-201.

2014 年

ヤマンラール水野美奈子,「大谷光瑞と大阪商工会議所」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第 16 号 pp.50-59